

天台法華教学から見た生命観―輪廻転生説をふまえて―

立正大学准教授 田村完爾

A、六道輪廻―①地獄道、②餓鬼道、③畜生道、④修羅道、⑤人道、⑥天道、に輪廻する。輪廻は生死と同義(生死を重ねて輪廻するため)。衆生が前世の業(行為)によって来世に六道に趣く(六趣)。煩惱・業・苦を重ねる。

B、生まれ方―四生(①卵生、②胎生、③湿生、④化生)。※化生：抛り所がなく、忽然として(たちまち)生まれること。六道の中では地獄・天の生まれ方。

C、生命の誕生(胎生。人道)―父母の愛因縁により四大(地・水・火・風)が和合し、精血の二滴が合して一滴となる。受胎直後の七日間を歌羅邏といい、命・煖・識が形成される。命は氣の出入、煖は体温、識は心意。寿命と身体と意識が生命の原初態。胎児は二六六日間の成長過程を経て出胎する。命・煖・識は本来、無自性・空であり、生命は、この三要素が一時的に和合して出来上がっている。

D、生より死までの有様―生老病死・四苦八苦(①愛別離苦、②怨憎会苦、③求不得苦、④五陰盛苦)。生命は無常を本質とし、本来、恐れる必要はないが、現実には死を恐怖と捉える。なぜか。生命は五陰(①色、②受、③想、④行、⑤識)を作用させることによって、固有の自我を形成する。命・煖・識の内、識だけを独立機能させて、寿命や身体を意識の管理下に置いている。そのため、生命までも自己の所有物とし、一切に執着する中で、この現実を生きる生き方が正当化されている。

E、生まれる場所―六道・三界(欲界・色界・無色界)↓仏教へ帰依し修行することにより四聖(声聞・縁覚・菩薩・仏)・界外の世界(三界の外。悟りの世界)へ。声聞・縁覚・菩薩は六道へ転生することも可能となる。

F、生死から脱却する方法―仏法に入門し(声聞・縁覚・菩薩の行を積み)、三界六道を超えて仏法の悟りの世界へ入る。四教(四段階の教え。小乗：三蔵教。大乘：通教・別教・円教)を学び修行する。

G、生死に戻る―菩薩の化他行・教化(遷化↓教化の場所を遷す)。四生(四つの生まれかわり方。後掲)を用いる。

H、輪廻のしかた―十二因縁(①無明、②行、③識、④名色、⑤六入、⑥触、⑦受、⑧愛、⑨取、⑩有、⑪生、⑫老死)。過去・現在・未来にわたり、因果を重ねて輪廻する。

①無明：過去に無明(煩惱)を起こした身心。
②行：過去に善悪の業を作った身心。

③識：過去の煩惱・業によって現在に母の胎に宿る。その時の最初の一念の貪り心。
④名色：母胎に宿った後、骨肉支節が固まるまでの四週間の状態。

⑤六入：母胎に宿って第五週間以後、だんだん発育し、眼・耳・鼻・舌・身・意の六根、毛髮、爪、齒等が完備し出産に至るまでの三十四週間の状態。
⑥触：生まれて二・三歳までの間、ただ単純な覚知を起こす段階。まだ苦楽を明らかに識別できない状態。

⑦受：四・五歳から十四・五歳までの間、ただ飲食や玩具等に対する浅い貪りの心を起こすが、まだ淫欲等の深い愛著心を起こさない段階。
⑧愛：十五・六歳以後、財宝を求め淫欲を起こすが、まだ強盛にならない段階。

⑨取：それ以後、年を重ね、種々の欲望が盛んになり、行動する段階。
⑩有：これまでに作ってきた業が増長し、未来の果報を受けることが決定する段階。
⑪生：未来に果報を得て命を宿す段階。

⑫老死：未来に生を受けた後、煩惱・業を重ね、死ぬまでの段階。

I、二段階の生死—①分段生死、②變易生死。二回の死を超え、成仏（妙覺）に至る。

①分段生死：身体・寿命に分段（限界）がある生死。三界の凡夫（六道）の受ける生死。業を因とし、煩惱を縁として来世に生まれる。寿命に長短の分限があり、身体の形に大小の別がある。

②變易生死：輪廻を超えた聖者（四聖）の生死。見惑（物の考え方の誤り）・思惑（欲望）という煩惱を断じた声聞・縁覺・菩薩は分段生死を受けない。自由自在に生まれかわる（現れたり消えたりすること）ができる。菩薩の残る煩惱は塵沙惑（無知の迷い）と無明（悟りをさえぎる根本煩惱）である。塵沙惑を残している菩薩は、業を因とし塵沙惑を縁として、生まれかわる。塵沙惑を断じた菩薩（一分仏の世界に入った「法身の菩薩」。無明を少しづつ断じて完全な仏になる）は、順道法愛（仏法への愛着心と仏道に従う行い）を因とし、無明を縁として、生まれかわる。

J、生死の迷いから悟りへの四段階の世界—四土（①同居土、②方便土、③實報土、④寂光土）。本質はぜんぶ同じ世界であるが、次元がちがう。

- ①凡聖同居土：分段生死の世界（六道）。凡夫（六道）と聖者（四聖）が同時に住む現実世界。
- ②方便有余土：變易生死の世界。声聞・縁覺と位の低い菩薩が住む（本拠地）。
- ③實報無障礙土：變易生死の世界。位の高い菩薩（法身の菩薩）が住む（本拠地）。
- ④常寂光土：すべての世界の本質。究極の悟りの世界。生死を離れた完全な仏の住む世界。

K、生まれかわる方法—四生（①業生、②願生、③神通生、④応生）

- ①業生：前世の業（善悪の行い）により、いやおうなく来世に輪廻転生する。六道の転生の仕方。※どうすると地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天に生まれる？自殺した場合はどうなる？
- ②願生：前世の強い誓願により来世への生まれかわる。
- ※「願兼於業」業と願をあわせて転生する。位の低い菩薩の転生の仕方。
- ③神通生：高位の声聞・縁覺と、中位の菩薩が神通力を用いて来世に生まれかわる。
- ④応生：高位の菩薩（法身の菩薩。真の悟りを部分的に体得し、一分仏の世界に入った菩薩。初住という段階以上の菩薩）が悟りの力により来世へ生まれかわる。応現・応来も同じ。

※菩薩の行位（五品・十信・十住・十行・十廻向・十地・等覺・妙覺）。

五品は低位、十信は中位、十住以降は高位の菩薩。十住の第一段階「初住」に登る段階で、無明（根本煩惱）を一分破し、中道（真実のさとり。諸法実相）を一分体得し、仏の世界に入っていく。妙覺に至ると、無明を完全に破し、中道を完全に体得し、完全な仏となる。

L、生死の本質

円教の悟り—種々に表現される。諸法実相、一念三千（十界互具・十如是・三世間）、円融三諦、無作四諦、一実諦、…みな悟りの世界を様々な角度から表現している。その中に「生死即涅槃」がある。

生死即涅槃—輪廻を離れて涅槃（煩惱を滅した悟りの境地）はない。迷いの世界の本質が悟りの世界である。表裏一体。↓法華経では寿命品自我偈に「衆生見劫尽。大火所燒時。我此土安穩。天人常充滿」とある。「娑婆即本土（久遠本時の四土）」「娑婆即寂光土」。

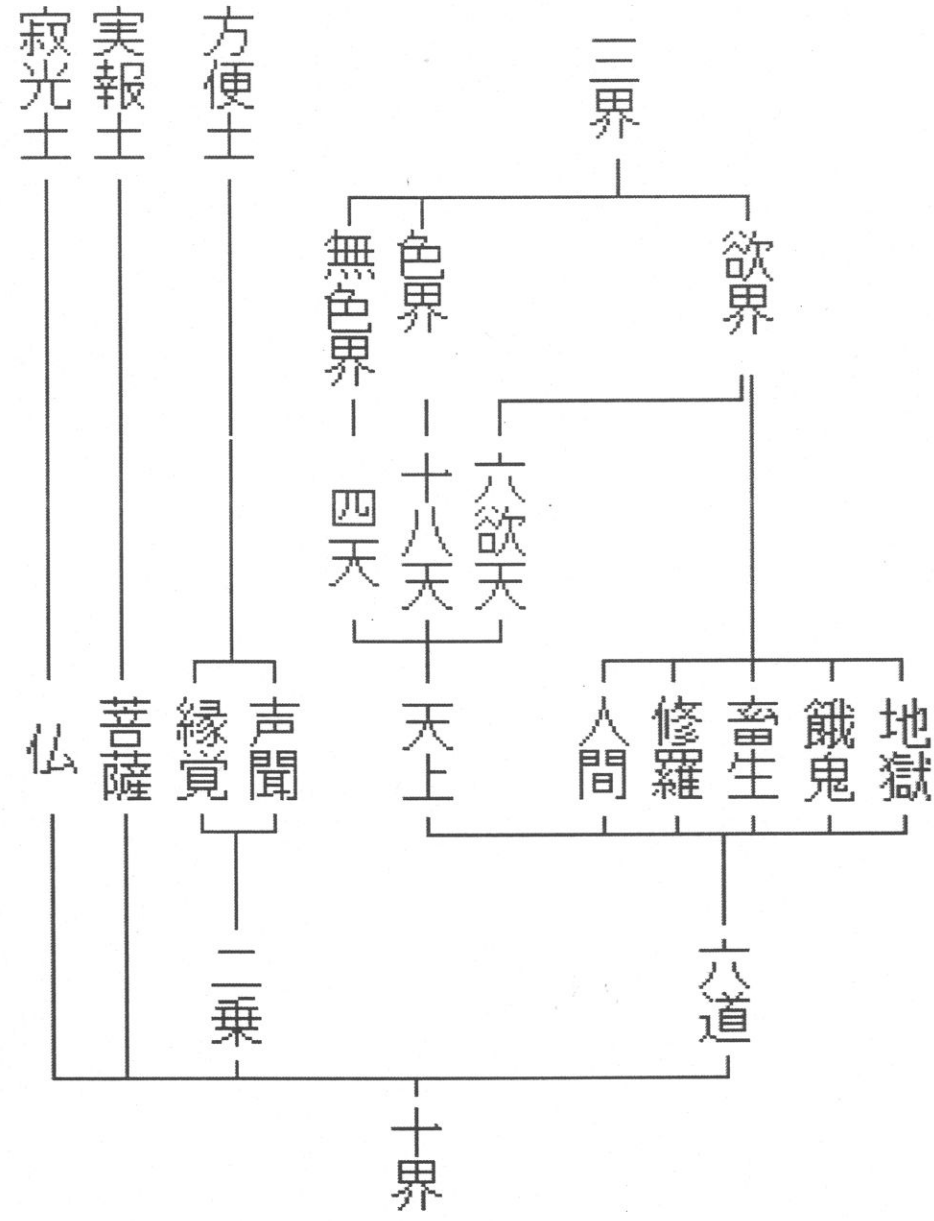
どの生命存在にも価値がある。「平等大慧一乘妙法蓮華経」「二雨等潤（※平等に降り注ぐ仏の慈悲の雨）」。すべての生命存在は仏に繋がっている。「十界互具」「但行礼拝」「皆成仏道」「行道不行道（※誰しもが仏につながる道を歩んでいる）」。

M、生死を超える修行

止観行—自我を形成する識の本質を徹底して観察し、退治する。人間の心中に生起する微細な煩惱を、一つももらさず観察し、退治する。これにより煩惱・業・苦の連鎖を断ち切り、六道輪廻を超越し、常・樂・我・淨の自由自在な仏の悟りの境地を目指す。

我々の一念心に原初態の生命はもとより、一切の差別事象も等しく具足する。生きながら苦界の生存を続けるか、仏界の生存を続けるかは我々次第。日常の一念心を見つめ、生命の不可思議は同時に一念心の不可思議と捉える。我々の一呼吸の中に、宇宙一切の生命が存し、一念心中に一切の宇宙の事象を本来具えていることを体得する。

三界六道図



果なり、爰にまた一重の因果を成ず。かくて三世輪廻、相續無窮なり。左に圖示せむ。

三世兩重の二十因縁

